



# 東京日々新聞

九百九十二号



其所も幽冥とて中か北と十日

一其脚崎明神と假と立てて人々

取ら殺す十九日よみ伊世の國

を神棚の鳴るるハハの音も

を成たて跡さう續け

至は怪談とて書ても

田朝ら小言を來るも知

ら多の併し此様を事も出

して置て世間の者

の夢の醒めの足ら

をうやと又妙的な咄と

記しき事足は武蔵秩父郡の上田野村の清四郎の

娘おつねと云ふ女ありて夜近所へ湯入り往て風と内と出

けこみ帰て來ぬも多父は心配し親類や懸念と成りて

近村を三日の間残る所を尋ね探したるも一向は行方が知生ず

一同心配して居たりて廿日の夜深きまうて忽ち清四郎の前の山を怪しき

声の聞ゆるも近所の者も打ち連きて山へ尋ね登りて見まは大本の茂りたる

中まかぬ髪のもを揮り乱し六尺の言竹と杖よのさ我の滑坂の

金尻羅のりかぬと同道て日光より古峰の原へ參りて來て何れ來年の

三月十七日あり又かぬと連て日光へ參るへと云ふと思へば



夫はありて金尻羅と

上られ玉ひて夢の醒よ

如くありしと足倉前

号し記したる長

竹小月打のむす

猪荷の類も知と

ませぬ



芳幾



繪具屋 渡辺彫米

